

ホメロス『イリアス』第十三歌

田中利光

ゼウスはそこで、トロイア人とヘクトルを船の近くに導き入れると
 両軍が船のそばで絶え間なく苦闘するのをそのままほうっておいて、
 自らは輝く目をそむけて、

はるか彼方に、馬を飼うトラキア人、近接して戦うミュシア人、
 馬乳で暮らす堂々たるヒツペモルゴス人、この上もなく正しいアピオス人の国を
 見下ろしているのだった。

トロイアには輝く両眼をもう全く向けていなかった。

というの是不死なる神々のうちの誰かがやって来て

トロイア人あるいはダナオス人に加勢するだろうとは思ってもいなかったから。

しかし抜かりなく見ていた、大地を揺るがす主ボセイドンは。

実際、戦の模様に見入りながら座っていたのだった、

木々生い茂るサモトラケ島の山の頂きに腰を据えて。

ここからはイーデー全山が見渡せた。

またプリアモスの町とアカイア人の船団がすっかり見渡せた。

つまり海から出てそこに座っていたわけで、アカイア人がトロイア人に

打ち負かされているのを哀れに思っていた。そしてゼウスにひどく腹を立てていた。

ただちに岩だらけの山から降りた、

すばやく足を前に進めて。大きな山と森が揺れていた、
進みゆくポセイドンの不死なる足の下で。

三歩目を踏み出し、四歩目で目指すアイガイに着いた。

そこには御神のために水底に輝く黄金の、永久に朽ちることのない

素晴らしい屋形が造られてあり、

御神はここに来ると車に繋ぐのだった、飛ぶように速く、

黄金のたてがみのふさふさした、青銅の足をした二頭の馬を。

自らは黄金の武具を身につけるのだった。そして黄金の立派な作りの鞭を掴んだ。

そして自分の車に乗った。

そして波の上を走らせていった。そして海獣たちが至るところ穴から出て

はしゃぐのだった、御神の御出でとあって。主を見紛うはずもなかったわけである。

嬉々として海の水は分かれていくのだった、馬たちはこの上もなく速く

飛んでいくのだった。下の方、青銅作りの車軸が濡れることはないのだった。

御神をアカイア人の船のところ、馬たちは飛び跳ねながら運んでいくのだった。

そして深い水底に、とある広い洞窟がある、

テネドスと岩がちなインプロスの中程あたりだ。

そこに馬を、大地を揺るがすポセイドンは留めて

車から解いた。そして不死の飼葉を投げ与えて

食わせた。そして足に黄金の足かせをはめた、

壊すことも解くこともできないのを。じつとそこに留まって

主の帰るのを待たせたわけである。そして御神はアカイア人の陣営に向かって行った。

トロイア人は炎あるいは暴風にも似て一団となり

プリアモスの子ヘクトルの後に飽くなき戦意を燃やして従っていた、

一斉に声を合わせて。アカイア人の船団を奪いとらんものと期していた、

また勇士らをとことく、その場で打ちとろうと。

しかし大地を揺すり揺るがすポセイDONは

アカイア人を励ますのだった、深い海から現れて、

姿形と囁れることなき声をカルカスに似せて。

はじめに二人のアイアスに声をかけた、当人二人も氣負っていたが。

「アイアスのご兩人、かならずやアカイア人の兵士を救うことができよう、

氣迫を失わなければ、ぞつとして逃げ出したりしなれば。

他の場合なら、このわたしも恐れていない、トロイア人の力、頑強で、

彼等は大きな壁を一斉に乗り越えてきたけれど、

すね当てよろしきアカイア人はかれらを皆押さえ込めるであろうから。

しかし今の場合この上もなくひどい目に会うのではないかと私はひどく恐れている。

というのは氣も狂ったように、炎にも似て指揮しているから、

力強きゼウスの子であると豪語しているあのヘクトルが。

そなたら二人がここにしっかりと踏み留まりもし、他の者どもにもそう命じもする、

神々の中でどなたかそなたら二人をその氣にさせてくれるとよいのだが。

そうすればいかにはやっつけていてもそなたらは脚速き船から彼を追い払うことになるう、

オリュンポスの主みずから彼を励ましているのであるうと」

大地をゆすりうごかす御神がこう言つて杖で

二人を打ち、逞しい力で満たした。

そして肢体をほぐしてやつた、両足と、上の方、両腕を。

自らは速い翼の鷹が飛び立つように、

ちように険しく高い岩から舞上がり

身構えて平原をほかの鳥を追い駆けていくように

そのように大地を揺るがすポセイDONは二人から飛び去つた。

二人のうち先にそれと気付いたのはオイレウスの子、脚速きアイアス。
そこでテラモンの子アイアスに語りかけた。

「アイアスよ、オリュンポスに住まう神々のうちのどなたかが
占い師の姿に自らを似せて我々二人に命じられたのだ、船の傍らで戦えと。
いやあれは神託を伝える鳥占いのカルカスではない。

立ち去っていく脚や脛の様子を後ろから見て
容易にわかった。それとわかりやすいのだ、神々であれば。

それに私自身も胸の中に闘おうという気持が
ぐんぐん湧いてきている、

下の方は脚、上の方は腕が鳴っている」

替わってテラモンの子アイアスが彼にむかって言った。

「私もこの通り、今や、槍に手をかけて、無敵の両腕が
いきり立っている。わたしの中にも勇気が湧き上がってきている。下の方、両脚が
武者ぶるいをしている。一人でも戦いたい、

あくまでも戦おうとするプリアモスの子ヘクトルと」

両人はお互いにこのようなことをこのように語っていた。

いざ戦わんと息を弾ませていた、二人を御神がその気にさせたわけである。

一方で大地を揺るがす御神は後ろに引き下がって脚速き船のかたわらで
元気を取り戻そうとしていたアカイア人を奮い立たせた。

彼らはひどく疲れ果てて手足は萎えていたのだった。

また大壁を乗り越えて一斉にやってきたトロイア人を目にして、

苦痛に胸を塞がれていた。

相手を見つめながら、臉から涙を流しているのだった、

災いから逃れられるとは思えなかったから。しかし大地を揺るがす

御神は彼等の間を行きめぐり、戦列を力強く立て直したのだった。

まず第一にテウクロスとレイトスに近付いて命じるのだった。

そして勇士ペネレオスとトアスとデイピュロス、

雄叫び高きメリオネスとアンティロコスの兩人に。

これらの者を励ましながら翼のある言葉を語りかけるのだった。

「恥だぞ、アルゴス人のお若い者たち。そなたらをこのわたしは

信頼している、戦つて我等の船を救つてくれると。

しかしもしそなたらが苦しみに満ちた戦から手をひくなら

その時こそトロイア人に討たれる日となるのだ。

ああなんとたることか、なんとという驚くべきことを目にすることよ、

恐ろしいことだ、このようなことが起こるとはかつて思つてみたこともなかった。

トロイア人が我々の船までやつてくるとは。以前なら

森の中でジャツカル、豹、狼の餌食になる、

あてもなくさまよつて身を守れず、戦う気力もない

憶病な鹿さながらに

トロイア人は以前はアカイア人の腕の力に

真つ向から対決する気はなかった、瞬時たりとも。

それが今は城を遠く離れて、うつろな船のそばで戦っている。

例の大将の愚劣と兵士らの怠慢のせいだ。

兵士らは大将に異を立てて脚速き船を

守ろうとせず、船の周りで殺されるままになっている。

まことに事実この責任は

アトレウスの子、治めるところ広き英雄アガメムノンにある、

なぜなら脚速きペーレウスの子を侮辱したのだから。

六〇

五九

一〇〇

一〇五

一一〇

しかしにもかかわらず、われわれが戦いをなおざりにしてよいことにはならない。

さあ、すばやく立て直そう。立派な人間なら、立ち直れるはずだ。

そなたらが戦い抵抗しないでいるのは立派とはいえない。

陣中そなたらは皆勇士たちなのだから。このわたしは

戦いをなおざりにするような役立たずの男となら言い争わないだろう。

そなたらだからこそ心底けしからんと思つて言つている。

腰抜けどもよ、こういう怠慢ぶりでは悪い事態をたちまちのうちにもつと

大きくしてしまうだろう。さあ、おのおの心に覚えよ、

恥と憤りの思いを。今や大いなる戦いが始まつているのだ。

ヘクトルは今や船の傍らで雄叫びも勇ましく力強く戦つている。

長い横木と門を撃ち壊してしまつた」

このように、見よ、大地を支える御神はアカイア人をくりかえしはげましつづけた。

そこで二人のアイアスを囲んで戦列が力強く

組み上がつていくのだった。その様子を、アレースも軍勢をかりたてるアテーネーも

やつてきても侮つたりしないだろう。というのは選りすぐりの

勇士たちが、トロイア人と神にも紛うヘクトルを迎え撃とうというのだから、

槍には槍を、盾には盾をしっかりと重ね合わせて。

そこで押し合つていた、盾が盾を、兜が兜を、人が人を。

互いに相手にもたれながら身を屈めるものだから

触れんばかりであつた、馬毛をつけた兜が兜の輝く角に。

槍がしなつていた、逞しい腕で振り回されて。

お互いが一途に思いつめていた、いざ戦わんとはやつていた。

そしてトロイア人が一斉にうつて出た。先頭に立つていたのは見よ、ヘクトル、

ものすごい勢いである。それはちょうど岩山の頂きから、てこでも動かぬ

岩根を雪解けで水嵩を増した河が猛烈な水の勢いで打ち砕いて押し流した岩のよう、

高く飛び上がって飛んでいく、そのために森はすさまじい音を立てる、

横に逸れることなくまっすぐころがっていつて、平地にいたる、

そうなると、いくらころがろうとしても全然ころがらない。

ちようどそのようにヘクトルは、アカイア人の陣屋と船の間を

やすやすとつき抜けて一時は海にまで到るばかりであった、

相手を討ち果たしながら。しかし密集した戦列にぶつかって

立ち止まった。アカイアの子らが立ち向かって

太刀と木の葉形の槍で突き立てて、

彼らの陣から押し戻した。ヘクトルは退いてよろめいた。

そして鋭い声で叫んで言った。

「トロイア人よ、それにリュキア人、それに白兵戦を得意とするダルダニア人よ

踏み留まれ。長くは、この私をアカイア人はおさえられないだろう、

城壁そっくりに陣形を組んでいても。

私の槍で退くだらうと思う、私を立たせた方が神々の中で最高のお方、

ヘーレーの夫君、雷を轟かす方であることは確かである以上」

このように言って各人の気力と勇気をかき立てるのだった。

皆の中からブリアモスの子デーイボボスが勇み立ち進みでていくのだった。

均斉のとれた盾で身構えていた。

足取りも軽く、盾で身を覆いながら前に進んで行くのだった。

メリオネスが輝く槍で彼を狙っていた。

そして投げた、そしてはずさなかった、牛皮の自在に操れる盾を。

しかしすこしも突きささらずに、その前に

槍先のところで長い槍は折れてしまった。デーイボボスは
牛皮の盾を身から離して構えた。心中恐れた、

戦い上手のメリオネスの槍を。しかるに勇士メリオネスは
仲間の集まっているところへ引き下がっていくのだった、勝負を逃したことで、
槍を折ったこと、両方のことで腹を立てて、

アカイア人の船と陣屋の方に歩いていった、
陣屋に残してある長い槍を持ってこようと。

一方ほかの者たちは戦っていた。抑えようもない叫び声が沸き起こっていた。
まずテラモンの子テウクロスが男を一人討ち果たした。

それは槍の名手インブリオス、多くの馬を持つメントルの息子。

アカイアの子らが来る前はペーダイオンに住んでいた。

そしてプリアモスのそばめの娘メシカステをめぐっていた。

しかるにダナオス人の両はじのそった船がやってくる

再びイリオンに来て、トロイア人の間で頭角をあらわしていったのだった。

そしてプリアモスのもとで暮らしていた。プリアモスはわが子同様大事にしていた。

この彼をテラモンの子が耳の下のところを長い槍で

突き刺した、そして槍を引き抜いた。するととねりこの木のように倒れた。

遠くどこからも見える山の頂きで

青銅の斧で切られ、みずみずしい葉を地につけるように、

そのように倒れた。念入りに作られた青銅の武器が身のまわりでカタカタと鳴った。

テウクロスが武器を奪い取ろうとして突進した。

ヘクトルが突進してきた彼に輝く槍を投げた。

しかし彼は真向かいに見て、青銅の槍をきわどくかわした。

してヘクトルはアクトルの子クテアトスの息子アンピマコスが

たたかおうとしてやってくるころを、胸元に槍を放った。

相手はどさっと音を立てて倒れた。身のまわりで武器がカタカタと鳴った。

ヘクトルは、勇ましくアンピマコスの頭から、そのこめかみに

びつたりつけた兜をもぎはなそうと躍りかかった。

アイアスが躍りかかるヘクトルを輝く槍でついた。

しかし全く肌には達しなかった。全身見るも恐ろしい青銅の武器で

おおわれていたのだ。そこで盾のほぞのところを突いた。

そして大力でヘクトルを押し戻した。ヘクトルは二つの遺体から

後ろに引き下がった。遺体はアカイア人が引きずり出した。

アンピマコスはアテナイ人を率いる二人、ステイキオスと

神にも紛うメネステウスがアカイア人の兵士らの方へ運び去った。

インブリオスの方は戦いの意気に燃える両アイアスが運び去った。

それはちょうど二頭の獅子が鋭い歯の犬から山羊を

奪い取り、地上高々と口にくわえて

深い藪の中を運んで行くのとそっくりだった、

ちょうどそのように、インブリオスを高々と持ち上げ、戦いの指揮をとる

両アイアスは武器を剥ぎ取るのだった。頭を柔らかな首から

オイレウスの子アイアスは切り取った、アンピマコスがやられたことに腹を立てて。

そしてそれはヘクトルの足元に土埃をあげて落ちた。

この時のことである、孫のアンピマコスが恐ろしい戦いで倒れた事で

ポセイDONは心底怒った。

そしてアカイア人の陣屋と船の方に歩いて行った、

ダナオス人を励ますべく。そしてトロイア人に苦しみを与えようと企んでいた。

すると槍で名高いイドメネウスが御神に出合った。

彼は仲間のそばからやってきたところ。その仲間は彼のもとに今しがた戦場からひかがみを鋭い青銅の槍で打たれてやって来たのだ。

仲間達が運んで来たのを彼は医者達に託し

陣屋にやって来たのだった。というのはなおも戦闘に加わりたいと

欲していたのである。彼に御主大地を揺るがすポセイドンが声をかけた、

声をアンドライモンの息子トアスに似せて。

このトアスはプレウロン全土と岩がちなカリュドンで

アイトリア人を治めていた。神のように人々から敬われていた。

「イドメネウスよ、クレテ人を指揮する男よ、一体どこへ行ってしまったのか、

トロイア人に向かってアカイアの子らがうそぶいていた大言壮語は」

彼に答えてクレテ人を指揮するイドメネウスは言うのだった。

「トアスよ、今責められるべき男は一人たりといないぞ、この私の

見るかぎり。我々はみな戦いの腕はいいぞ。

元気をなくし、恐がつているものは誰もいない、辛い戦から

たじろいで身を引こうという者もない。しかし思うに、これが、

力あるクロノスの子ゼウスのお好みなのであるう、

アルゴスから離れたここで、アカイア人が名も知られずに滅んで行くというのが、

しかしトアスよ、そなたはこれまで頑強でもあったし、

ほかのものがひるんでいるのを見れば励ましてもきた。

そこでこの場も、変わらずに、各人に声をかけてくれ」

彼に答えて大地を揺るがすポセイドンは言うのだった。

「イドメネウスよ、トロイアの地から無事帰るようなことがあつてはならぬ。

ここで犬の慰みものになるがよい、

この日に自分から戦いを怠るような男は。

さあさあ、武器を取ってここへ来い。力を合わせて急がねばならぬ、我々二人であるとはいえ、なにほどか役に立とうというのであれば、てんで役立たずの男も力を合わせれば雄々しくなるものよ、

まして我々二人で当れば、つわものを相手にしても戦うことができよう」

こう言つて御神はふたたび出向いた、男たちのたたかいの中へ。

一方イドメネウスはしつかり作られた陣屋に着くと

立派な武器を身につけた、槍を二本取つた、

稲妻のようにいで立つた、それはクロノスの子が

手にとつて輝やかしいオリュンポスから人間どもに兆を与えつつ

揺り動かす、その光が眩く輝くように、とでもいうように

青銅の武具が輝いていた、駆けていくイドメネウスの胸のあたりで。

すると見よ彼の立派な従者メリオネスがまだ陣屋近くの

彼に出合つた。青銅の槍を取つてしようと

戻つてきたところだつた。力強いイドメネウスは彼に声をかけた。

「メリオネスよ、モロスの息子よ、脚早く、仲間のうちでもっとも親しい者よ、

どうしてやつて来たのか、いくさと戦闘を後ろにして。

それともどこかやられているのか。矢の先が突き刺さり痛んでいるのか。

それともなにか知らせでもあつて私のところに来たのか。この私の

欲しているのは陣屋に座つておくことではなくて戦つて居ることだぞ」

彼に答えて機敏なメリオネスは言うのだった。

「イドメネウスよ、青銅の鎧をつけたクレテ人の采配を振る方よ、

私が来たのは、もしやあなたの陣屋に槍が残つていれば

いただこうと思ひまして。実はこれまではさきほど折つてしまいました、

不遜なデーイボボスの盾に打ちつけて」

彼に答えてクレテ人の指揮者イドメネウスはいうのだった。

「槍が欲しければ、一本といわず二十本でも

陣屋のかてかてかに光った壁に立て掛けてあるぞ。

討ち取ったトロイア人から私が奪い取ったものだ。敵から

離れたところに立って戦うことなど頭にないから取れたのだ。

そこで槍もほぞの出た盾も

兜もきらきら輝く胸当てもどっさり私のところにはあるのだ」

それに答えて機敏なメリオネスは言った。

「この私にも陣屋と黒い船に、トロイア人から奪った武器は

たんとあります。しかし手近でなく、取ってくるわけにはいきません。

この私も戦う気持を忘れたのでは決してありません。

男に誉れをもたらす戦闘では先陣に

立ちます、いざ戦うということになつたらいつでも。

青銅をよろつたアカイア人の中で、余人なら私が戦っているところを

気がついていないかもしれませぬ。しかしあなたならご存じと思います」

これに答えて、クレタ人を指揮するイドメネウスは言った。

「承知している、そなたの勇気がどれほどのものか。そなたがわざわざ言うまでもない。

今、船の傍らに待ち伏せすべく我等將たるものが選ばれたとしよう、

その場合にこそ男の勇気の見分けがつく。

憶病者と勇者との区別がはっきりする。

憶病者の顔色はあれこれ変わる。

胸の思いは落ち着きはらって静かであることがない。

しゃがみこんで足をもぞもぞさせ、

死を思つて胸のうちでは心臓をどきどきさせ、
齒をがたがたさせる。

しかし勇者は顔色ひとつ変えず、さほど
恐れもしない、一旦伏兵として位置につけば。

そして願うものだ、できるだけ早く苦しい戦いに身を投じたいと。

そんな場合、そなたの勇氣と腕前を馬鹿にするものはあるまい。

戦いの中で、射かけられるにせよ、突き刺されるにせよ

首の後ろや背中をやられることはないだろう。

討たれるとすれば、胸か腹ということになるだろう、

前線での取っ組み合いを求めて前へ前へとそなたは出ていくのだから。

しかしさあ、ぼんやり立ってこんな子供じみた話をしているのは止めよう、

かんかんになって腹を立てる者がいても困るからな。

さあそなたは陣屋に行つて頑丈な槍を取ってくるがよい」

このように言つた。すばやいアレース神にも似たメリオネスは

ただちに陣屋から青銅の槍を取つてきた。

そしてイドメネウスの後から、いざ戦わんかなの意気に燃えてついで行つた。

その様子は人間を打ち砕くアレース神が戦さに出向き

御神にはその息子ポボス「敗走」が、力強く恐れ知らずで、

勇猛な戦士をも敗走させるお方だが、付き従うとでもいう具合。

ふたりの神はトラキアから出てエピュロス人側か

あるいは大胆なピュレギュス人側かに加わる。そして

両方の言い分は聞こうとせず、片方に榮譽を与える。

そのように男たちを指揮する兩人、メリオネスとイドメネウスは

輝く青銅の武具をまとい戦さに向かうのだった。

イドメネウスにメリオネスがまず話しかけた。

「デウカリオンの御子よ、軍勢のどのあたりに攻め込むおつもりか。全軍の右手ですか、それとも中央ですか、

それとも左手ですか。髪ふさふさとしたアカイア人の左手ほど

防御の手薄になっているところはないと思えますが」

これに答えて次にクレタ人の指揮者イドメネウスは言ったのだった。

「船陣の中央部は他にも防ぎ手がいる。

両アイアスに、アカイア人の中では飛び抜けた弓の使い手テウクロス、白兵戦でも勝れている男だ。

彼等がかの男を思う存分追い払ってしまうだろう、プリアモスの子ヘクトルがいかに戦いにはやっつけていても、またいかに強かろうとも

彼には難しいことになろう、いかに戦いの意気に燃えていても

彼等の力と不屈の腕前に打ち勝って

船に火をつけることは。クロノスの子ゼウス自らが

足速き我等の船に火をつけた燃え木を投げ入れるのでなければ。

テラモンの子大アイアスはどんな男にもひけをとらないだろう、

死すべき人間、女神デーメーテルの与える穀物を食する者、

青銅の武器と大きな石でもって打ち砕くことのできる者なら。

敵の戦列を打ち破る男アキレウスにも引き下がらないだろう、

渡り合いならば。足ではとてもかなわないが。

我々二人は、いいか、部隊の左手に向かう、すぐにも

見よう、敵に誉れを与えるのか、我々に敵が誉れを与えるのか」

このように言った。メリオネスは足速きアレース神さながら

先に立って行くのだった。そしてイドメネウスの指示した部署に着いた。

そしてトロイア軍は勇氣に燃えるイドメネウスと

彼の従者が珍しい作りの武器をつけた姿をみると

群の中で互いに声を掛け合い、こぞってイドメネウスに向つて押し寄せた。

そして両軍入り乱れての戦いが船尾のあたりで持ち上がったのだった。

その様子は道に砂埃がびっしり積もっている日に

風が鋭い音を立て、突風が荒れ狂い、

風が一斉に埃の大きな雲を巻き上げるよう、

そのように彼等はぶつかり合つて戦つた。氣負ひ立っていた、

揉み合つてお互いに鋭い青銅の武器で打ちとろうと。

人を滅ぼす戦場は兵士が手にしていた肌を突き刺す

長い槍でささくれだつたよう。目もくらむのだった、

両軍がぶつかり合うと、光る兜の青銅の輝きで、

磨き上げられた胸当て、きらめく盾の光で。

非常に心の強い者であらう、

その苦闘を見て、その時喜ぶものは、悲しむことをしない者は。

そしてクロノスの二人の偉大なる息子は異なる考えを持ち、

勇士らに恐るべき苦難を与えようとしていたわけである。

ゼウスはトロイア人とヘクトルの勝利をはかり、

足速きアキレウスに榮譽を与えようとしていた。ただし

アカイア人をイリオスで滅ぼそうという気は全くなかつた。

ただテティスと豪胆なその息子に榮譽を与えようとしていたのである。

一方ポセイドンはアルゴス人の間に入り、励ましていた、

ひそかに灰色の海から上がつてきて。彼等がトロイア人にやられているのを

悲しんでいたからである。そしてゼウスに激しく怒っていた。

三〇

三五

四〇

四五

五〇

もとより二人は家系も両親も同じだ。

しかしゼウスの方が生まれは早く、より多くものを知っていた。

そこでまたポセイドンは、表立って助けることは避けていた。

いつも密かにアカイア軍の間で励ましていた、人間の姿をとって。

二人の神は激しい敵意と痛ましい戦いの

綱を交互に引いて、両軍を戦わせた。

綱は切れもせずほどけもせず、多くの兵士の膝をひしんだ。

この時イドメネウスは髪がもう白くなっているとはいえダナオス人を叱咤して

トロイア人の中に飛び込み、恐怖を巻き起こした。

なぜかというとかベソスからトロイアに来ていたオトゥリュオネウスを打ち取ったから。

この男は戦さの噂を聞いてついこの間、やってきていた者で、

プリアモスの娘達の中で容貌ことのほか優れたカッサンドラを

妻にと求めたのだった、贈り物はないが、大きな仕事を約束した、

トロイアからアカイアの息子らを有無を言わせず追い払ってみせると。

老プリアモスはうなずいて約束した、

娘をやる。かれはその約束を当てにして戦っていたのだった。

イドメネウスはその彼に輝く槍で狙いをつけていたのだった。

胸を張ってやってくる。腹の真ん中に突き刺さった。

どうと倒れた。イドメネウスは勝ち誇って言った。

「オトゥリュオネウスよ、そなたのことを誰にもまして立派だと誉めてやるぞ、

もしそなたがダルダノスの裔プリアモスに約束したことを本当に

皆果たしたならば。プリアモスは自分の娘をやる約束したが、

我々もそのぐらいのことは約束しよう。

アトレウスの子の娘のうち一番の器量よしをアルゴスから連れて来て妻にするべく計らおう、もし我々と一緒になつて

暮らし向きのよいイリオスの城市を滅ぼしてくれるならば。

さあ、ついてこい、海を渡る船の上で婚礼の話を

とりきめようではないか、そなたにとつて我々は悪い仲人ではないのだから」

こう言つて勇士イドメネウスは片足を掴み、激しい戦いの中を

引つ張つていくのだった。オトウリュオネウスを助けようとアシオスが駆けつけた、

馬の前に立つて徒歩で。たずなをとる従者は馬の息が彼の肩にかかるほどの

位置につけてついでにきた。アシオスはやるのだった、

イドメネウスをめぐりて槍を投げようと。イドメネウスはそれより早く槍を投げた、

あごの下、喉のところ。ずぶりと槍を突き立てたのだった。

アシオスは倒れた、ちようどなにか樫かポプラの木のように、

あるいは丈高い松の木のように。その松を山中で船大工の男たちが

船材とすべく、よく研いだ斧で切り倒したとでもいうような。

そのように馬と戦車の前にのびて横たわっていた。

うめき、血塗れの砂を掴んでいた。

彼の従者はそれまで持つていた正気を失つた。

敵方の手を逃れて、馬を引き戻す気力も失つた。

その彼を、後にひかないアンティロコスが、

槍でその胸を狙つて突き刺した。身につけていた青銅の

胸当ても役に立たず、腹の真ん中に突きささつた。

そして彼はあえぎながら立派な作りの戦車からころげ落ちた。

馬を、気持ちの大きなネストルの息子アンティロコスは

トロイア人のところから脛当て良きアカイア人の方へ走らせた。

するとデーイポボスがイドメネウスの間近にやって来た、アシオスのことを悲しんで。そして輝く槍を投げつけた。

しかしイドメネウスはまっすぐ見据えて青銅の槍をかわした。均斉のとれた盾のかげに身をひそめたからである。

彼の携えていたそれは牛の皮と輝く青銅が渦巻き状になっていて、縦横に補強されていた。

この盾に全身身を屈めると、青銅の槍はその上を飛んだ。槍が上を飛ぶと盾はヒュツと音を立てた。

しかし太い手から放たれた槍は無駄に終わらず兵士等の長ヒツパソスの子ヒュブセーノールの

みぞおちの下、肝臓のところにあたった。たちまち膝の力を奪った。デーイポボスは高々と声張り上げて言った。

「間違いなくこれでアシオスの仇を取ってやったぞ、厳しく門を守るハデスの国に行っても

喜んでくれると思う、付き添いをつけてやったのだから」このように言った。こう勝ち誇られてはアルゴス人に苦痛が襲った。

わけてもいくさ上手のアンティロコスは胸が痛むのだった。しかし悲しみのうちにも友の世話を怠らなかつた。

走りよって身を庇い、盾で被ってやった。それから彼を二人の誠実な友が担いで、

二人とはエキオスの子メキステウスと神にも紛うアラストールであるが、うつろな船へと運んでいくのだった、激しくうめくのを。

そしてイドメネウスといえは大いに戦意を燃やし、これを緩めることはなかつた。ひっきりなしに、トロイア人の誰れ彼を死の闇で被おうとはやっていた。

またアカイア人への災いを防ぎつつ、自らは倒れてのちやまんの気構え。

この時、ゼウスに慈しまれているアイシユエテスの、愛する息子

勇士アルカトオスを、——彼はアンキセスの娘婿で、

長女のヒッポダメアをめぐっていた。

彼女は心底父親と母君から屋敷内で愛されていた。

この娘は同じ年頃の娘たちのなかで優れていた、

美しさ、手仕事、気立ての点で。それゆえまた彼女を

妻にしたのは広いトロイア第一の男だったわけだが——

その彼をその時イドメネウスの手によつてPOSEIDONは討ち果たした、

輝く両眼に魔術をかけて。すばらしい手足の動きを取れなくした。

後ろに逃げることも槍をよけることもできないでいた。

石柱か高く葉の茂った木のように

じつと立っているところを、胸の真ん中を槍で突き刺した、

勇士イドメネウスは。そして突き裂いた、巻いている青銅の下着を。

これまでは肌身から死を防いでくれていたが

この時ばかりは槍で切り裂かれて、乾いた音を立てた。

彼は音を立てて倒れた。槍は心臓に突き刺さっていた。

心臓はぴくぴくとし、槍先をも震わせていた。

それから戦う気力も失せていくのだった。

イドメネウスは高々と声張り上げて言った。

「デーイボスよ、まったくもって勘定が合っているのかな、

一人の代わりに三人殺されるというのが。そういう大口をたたいているので聞くが、

おかしな男よ、そんなことよりそなたも私に面と向かってこい。

そうすればわかるだろう、わたしの腕前の程が、こころなるわたしはゼウスの裔、

ゼウスは始めにミノスを生んだ、クレタの守り手として。
ついでミノスはすぐれた息子デウカリオンをもうけた。

してデウカリオンは私を生んだ、広きクレタの

多くの人々の王として。そして今ここへ私は船に運ばれて来た、
そなたにとつても、そなたの父にとつても、ほかのトロイア人にとつても災いとして。

このように言った。デーイポボスは二通りに思いめぐらした。

心広きトロイア人のうちの誰かに加勢を求めたものか、

一旦引き下がって。それとも単身でも一戦を試みるべきか。

こう思案しながら、アイネイアスに頼むのが

良いと思われた。行ってみると彼は軍勢の一番後ろに引き下がって

立っていた。というのはかねて神にも紛うブリアモスに腹を立てていた。

というのは男たちのうちで優れている自分を一向に高く買っていないから。

デーイポボスは近付いて行き、翼のある言葉を語りかけるのだった。

「アイネイアスよ、トロイア人の評議を導く者よ、今こそ

義理の兄弟を守ってやらなくてはならない、身内を失うのを悲しむならば。

さあついて来てくれ、アルカトオスを守ってやろう。彼は義理の兄弟ながら

かつてそなたがまだ幼少の頃屋敷でそなたを育ててくれたのだ。

その彼を槍の誉れ高いイドメネウスが討ち取ってしまったのだ」

このように言って、彼の胸の内をかきたてるのだった。

してアイネイアスはイドメネウスに向かって行った、大いなる闘志を燃やして。

しかしイドメネウスは小児のように逃げ出すことはしなかった。

踏み留まっていた。それは猪が山の奥でおのれの力を頼んで

人気がない場所で、沢山の狩り手がやってくるのを待ちうけるように、

背中の毛を逆立て、

両眼を燃えんばかりに輝かせ、牙をならして、
獵犬と狩り手をよせつけまいている、

ちようにそのように槍で名高いイドメネウスは踏み留まっていた。

助けにやってくるアイネイアスに対し、後に引かず、仲間たちに呼び掛けるのだった。

アスカラポス、アパレウス、デーイピュロス、

メリオネス、アンティロコス、これら関(とき)の声を導く者どもを見て、

彼等を励まして翼のある言葉をかけるのだった。

「来てくれ、みんな、私は一人だ。加勢してくれ、ひどく恐ろしい、

足速きアイネイアスがわたしにむかってやってくるのだ。

たたかいでひとをあやめることにかけてはひどく強いおとこだ。

それに若さの盛り、力が最も強い年頃だ。

わたしのこの意気で、年が同じであれば

すぐさま勝ちをさらうのはあちらか、あるいはこちらかというところだ」

このように言った。彼等は気持ちを一つにして

身をよせて立った、肩に楯をもたれさせて。

かたやアイネイアスは、自分の仲間を呼び集めるのだった、

デーイボス、パリス、神にも紛うアゲーノールを見やりながら。

彼等はいずれもトロイア人を指揮するもので、兵士らも

従うのだった。それはちようにど雄羊のあとについて牧場を出て

水を飲みに行くよう。すると羊飼いは心をよるこばせる、

ちようにそのようにアイネイアスは胸のうちで心を喜ばせているのだった、

兵士らの群れが自分の後に従うのを見て。

さてアルカトオスをめぐって両軍が接近し長槍が

激突した。胸のあたり青銅の武器が

四七五

四八〇

四八五

四九〇

四九五

激しく音を立てた、お互いを狙いぶつかり合つて。他に抜きんでて戦いの意気盛んな二人の男が

アイネイアスとイドメネウス。アレースさながら

互いの肌を容赦なく青銅の槍で突こうとはやっていた。

アイネイアスがまずイドメネウスめがけて槍を投げた。

しかし彼はまっすぐに見すえて青銅の槍をよけた。

アイネイアスの槍は地べたにささっていき、

ぶるぶると震えていた、逞しい腕から飛び出していったが当らずに。

イドメネウスの方はオイノマオスの腹の真ん中めがけて槍を投げた。

そして胴鎧の前板を打ち砕いた。槍ではらわたが流れ出た。

彼は砂埃を立てて倒れ、その手で地べたを掴んだ。

イドメネウスは屍体から長い陰を引く槍を引き抜いた。

しかしその上美しい武器を肩から奪い取ることはできなかった、

しきりに槍を突きかけられていたからである。

槍を突き立てて攻撃を仕掛けることも、相手の槍をかわすのも

足元がおぼつかなく、難しかった。

そこで接近戦のただなか、容赦ない死の運命を辛うじて防いでいたが、

すばやく戦いから身を引こうにも足がきかないのだった。

彼が一步一步退いていくところをデーイポボスが

輝く槍を投げた。まこと彼には尽きぬ恨みを抱いていたわけである。

しかし彼はこの時も外した。槍が当たったのはアスカラボス、

(アレース) エニユアリオスの息子だ。頑丈な槍は

肩を貫いた。彼は砂煙を立てて倒れ、手のひらで地べたを掴んだ。

しかし叫び声も恐ろしい、猛きアレース神はすこしも知らないでいた、

自分の息子が激しい戦いで倒れたのを。

神はオリュンポスの頂きで、黄金の雲の下に

座っていた、ゼウスの意向にしばられて。ここには他の

不死なる神々も戦いから遠ざけられていたわけである。

アスカラポスのしかばねをめぐる両軍ぶつかりあった。

デーイポボスはアスカラポスから輝く兜を

もぎとった。足速きアレースにも似たメリオネスが

彼に躍りかかり、槍で腕を突き刺した。手から

羽飾りのついた兜は地べたに落ちて音を立てた。

メリオネスはふたたび禿鷹のように躍りかかった。

デーイポボスの腕のつけねから頑丈な槍を引き抜いた。

そしてまた仲間の方に退いて行つた。一方デーイポボスを実の兄弟

ポリーテースがその胸のまわりに両手をまわして

いまわしいひびきの戦場から連れ出していくのだった、足速き馬のところまで。

この馬たちは戦場の後方で、御者と、

それに念入りに造られた戦車の傍らに控えていたわけである。

傷を負って激しくうめく彼を馬は町へ運んでいった。

刺されたばかりの手から血がしたり落ちていた。

ほかの者たちは戦いつづけ、消えることなく叫び声が立ち上っていた。

アイネイアスはカレートールの子アパレウスに襲いかかり、

自分の方に向かつてくるところ、鋭い槍で喉を突き刺した。

頭は片方に傾いた。楯と兜も放り出した。

息を奪う死が彼の身をおおった。

またアンティロコスとトオーンが身を翻したのを見逃さず

五五

五〇

五五

五〇

五五

襲いかかつて槍で刺した。そして血管を絶ち切った、背筋を通って首に達しているのを。

これですっかり絶ち切った。彼は仰向けになって砂塵を立てて倒れた、両の手を親しき友らにさしのべながら。

アンティロコスは襲いかかった、そして肩から物の具を剥ごうと手をかけた、あたりに目を配りながら。トロイア人は思い思いの方向から

彼の幅広い見事な楯を槍で突くのだった。しかしできなかった、アンティロコスの柔らかな皮膚を非情の槍で突き刺すことは。

というのは大地を揺るがすポセイドンが

ネストルの息子アンティロコスを守っていたから、槍の飛び交うなかでも。

実際アンティロコスはいつも敵から離れず、敵陣の中を

走り回っていた。槍を絶えず動かし、絶えず

振り回していた。胸中思案を続けながら、

敵に槍を投げるか、さもなければ近付いて襲いかかるかと。

だが群がる軍勢の中で思案していると、ところをアシオスの子アダマスに気付かれた。

アダマスは近付いて、鋭い槍でその楯の真ん中を突いた。

黒い髪のポセイドンはその槍先の利きを奪った。

アダマスにアンティロコスの命を奪うことを許さなかった。

槍の半分はアンティロコスの楯に尖の焼けた杭のように残った。

半分は地べたに転がっていた。

アダマスは死を逃れようと、身を翻して仲間の中に戻ろうとした。

メリオネスが逃れる彼に追いつき、槍を投げた。

場所はかくし所と臍の真ん中、あわれな人間にとって

そこは戦場での傷でもっとも苦しい所。

まさにここに槍をメリオネスは打ち込んだ。突き刺さった槍にみもだえして、

アダマスはあえぐのだった。山中で牛飼いの男たちがいやがるのを

むりやり綱でしばって引いていく牛のように。

槍を打ち込まれて、そのようにしばらくはあえいでいたが、長くはつづかず、

勇士メリオネスは近寄り、体から槍を引き抜いた。

アダマスの両眼を闇が覆った。

一方デーピュロスをヘレノスがトラキア産の大太刀で

こめかみに切り付けた。そして兜を叩き落とした。

それは叩き落とされて地べたに落ちた。アカイア人の一人が

戦う二人の足元に転がっているのを拾い上げようとした。

デーピュロスの目に真つ暗な闇が下り、彼の体を覆った。

アトレウスの子、見事な雄叫びのメネラオスを悲しみが捉えた。

勇将ヘレノスに向かって形相すさまじく迫っていった、

鋭い槍をしごきながら。一方は弓を引きしぼるのだった。

二人は同時に、一方は鋭い槍を

投げようとはやり、一方は弓弦から矢を放とうとはやった。

プリアモスの子ヘレノスは相手の胸のあたりに矢を当てた。

胴鎧の前板に鋭くとがった矢は跳ね返って飛んだ。

それは大きい脱穀場で幅広のシャベルから

黒豆か、ひよこ豆が跳ね上がるよう、

もみがらを吹き分ける男の勢いに強く風に煽られて。

そのように蒼れ高きメネラオスの胴鎧から、

先の鋭い矢は大きく弾かれて遠くに飛び去った。

アトレウスの子、見事な雄叫びのメネラオスは

五七〇

五七五

五八〇

五八五

五九〇

よく磨いた弓を持ってゐる相手の手もとに槍を投げつけた。弓にまで
ずぶりと手を貫いて青銅の槍は届いているのだった。

五五

ヘレノスは死をのがれようと、仲間の間に退いていった、

手をたらししたまま。とねりこの槍はそのままひかれていくのだった。

そしてそれを手から勇敢なアゲーノールが引き抜いた。

そして手を、よく擦った羊毛の投石用の帯で包帯した。

それは従者アゲーノールが主人のために持っていたわけである。

そしてペイサンドロスが、まっすぐ、名だたるメネラオス目指して

進んできた。彼を悪しき運命が死の結末へと導いていたのだった、

メネラオスよ、恐るべき戦いのさなか、そなたによつて打ち果たされるのだ。

両者がお互いに進んで近付いたまさしくその時、

アトレウスの子メネラオスは槍を当てそこない、槍は脇に逸れた。

他方ペイサンドロスは名だたるメネラオスの盾を槍で

突いた、しかし突き通すことはできなかった。

幅広の盾は槍を受け止めた。槍先のところが折れた。

にもかかわらずペイサンドロスは心中喜び、勝てると思つていた。

アトレウスの子は銀の鉞を打った剣を引き抜き、

ペイサンドロスにおどりかかった。彼は盾で身を庇いながら立派な

青銅の斧を握つた、長い、よく磨かれた、オリイヴの柄が

差し込んであるのを。お互い同時に切りかかった。

一方は馬毛でおおつた兜の嶺を打つた、

ちようど飾り毛の根元のところを。また一方は向かってくる相手の額を、

鼻の付け根の上を切つた。骨の碎ける音がした。二つの眼球が

足元に血塗れになつて地べたに落ち、埃を立てた。

六五

六〇

六〇五

六〇〇

身を屈めて倒れた。メネラオスは胸を踏み付けながら

武器を剥ぎ取り、勝ち誇つていうのだった。

「かならずこのようにお前達は、駿馬を駆るダナオス人の船から引き上げることになろう。傲慢なるトロイア人よ、恐るべき戦いに飽きることを知らぬ。

他にも悪行、破廉恥に事欠かぬ。

さよう、この私にお前達は働いたのだ、卑しい雌犬どもよ。

客への札を重んじる、雷鳴轟かすゼウスの激しい怒りを少しも恐れなかった。

ゼウスはいずれ高くそびえるお前らの町を滅ぼしてくれよう。

お前らは私の妻と多くの財宝を

持ち去つた、妻のもとで歓待されながら。

今はまた大海を渡る船の中へ呪わしい火を投げこもう、

アカイアの勇士を打ち殺そうと意気込んでいる。

しかしいずれ戦いを止めることになるだろう、いくら戦いに逸つていても。

父なるゼウスよ、あなたは英知にかけては、他の何者にも、人間にも神々にも

たち優つていと人は申しております。しかしこの事態はすべてあなたから出ております。

こともあろうにトロイア人のような無法者の肩を持つておられる。

彼等のねらいはいつも非道なことばかり。

悲惨な戦争の争いに飽きることを知りません。

何事にも満ち足りるということはあるものです、眠りにも、色事にも

甘い歌にも、楽しい踊りにも。

そして人はこちらの方をこそ楽しみ尽くしたいと思うものです、

戦ごとよりも。ところがトロイア人は戦に飽きることを知りません」

こう言つて血塗れの武器を相手の身体から

剥ぎとつて味方の者らに誉れ高いメネラオスは引き渡すのだった。

六〇

六五

六三〇

六三五

六四〇

自らは又前線に向向いて、部隊に加わった。

この時ピュライメネス王の息子ハルパリオンが彼に躍りかかった。かれは戦うべく父についてトロイアに

来ていたが、ふたたび祖国に還ることはなかった。

その時近くからアトレウスの子の楯の真ん中を槍で

突いたが、貫き通すことができず、

死を逃れようと、味方の間に入って行こうとした、

だれか槍で突いてくるものがないか、あたりを見回しながら。

立ち去ろうとするところを、メリオネスが青銅の矢を放ったのだった。

尻の右側に当てた。すると矢は

真っ直通って骨の下の膀胱を貫いた。

その場に座り込み、仲間の手の中で

息絶えて、地虫のように地上に

長々と横たわっていた。黒い血が流れ出て大地を濡らしていた。

勇敢なパブラゴニア人が彼の面倒をみて、

車に乗せて聖なるイリオスへ運んでいくのだった、悲しみながら。

父親は涙を流しながらついていったが、

死んでしまった息子の償いは得られるべくもなかった。

ハルパリオンが討たれたのをパリスは激しく怒った。

というのは多くのパブラゴニア人のなかでも彼には特別の客友であったから。

彼の死に怒って青銅の矢尻の矢を放ったのだった。

ところでエウケノルなる者がいた。占い師ポリュイドスの息子で、

裕福にして勇敢、コリントスに家があった。

恐るべき死の運命をよく承知した上で、船でやって来た。

というのは常々彼に言っていたから、立派な老人ポリュイドスが、お前は辛い病気で、自分の屋敷で弱って死ぬか、

アカイア人の船のかたわらでトロイア人に討たれるかだと。

そんなことを言われたのでアカイア人から受ける戦争逃れの辛い罰金も苦しい病気もどちらも避けようとした、辛い思いをしないために。

パリスは彼の顎と耳の下を射当てた。たちまち命は肢体から離れていき、忌まわしい闇が彼をとらえた。

このように人々は燃えさかる火のように戦っていたが、

ゼウスに愛されたるヘクトルは聞いてもおおらず、知らずにいた、船の左手の部隊がアルゴス人に討たれているのを。

アカイア人が勝つのも間近だったろう。

というのは、大地を支え、大地を揺るがす御神がまさしくアルゴス人を激励し、自ら力を奮って加勢していたからである。

しかしヘクトルは、始めに門と防壁の中に躍り込み、

楯で身をかためたダナオス人の密集陣を打ち破った場所から動かなかつた。ここはアイアスとプロテシラオスの船が灰色の海の渚に

引き上げられていた。そして陸側には

防壁も一番低く造られていて、そのところまで

人馬もろとも激しい戦いが行われていたのである。

ここではポイオティア人、長い裾着のイオニア人、

ロクリス人とプティア人、名高きエペイオス人が

船に攻め入ろうとするヘクトルを懸命に押さえようとすが、炎にも似て神にも紛う彼を押し戻すことはできないでいた。

アテナイ人のなかの選り抜きの者たちがいた。これを率いていたのは

ペテオスの息子メネステウスで、従つてきていたのは、

ペイダス、ステイキオス、有能なビアス。エペイオス人を率いるのは
ピュレウスの子メゲス、アンピオン、ドラキオス。

プティア人の先に立つのはメドンと戦いでは一歩も引かぬポダルケス。
神にも紛うオイレウスの妾の子メドンは

アイアスの兄弟だ。そして故国を離れて

ピュラケーに住んでいた。父オイレウスの妻、
彼の継母エリオピスの身内の男を殺したので。

またポダルケスは、ピュラコスの子イピクロスの子であつた。

この二人が武器に身を固め、勇敢なるプティア人の先に立ち
ポイオティア人と組み、船を守つて戦っていた。

オイレウスの足早き息子アイアスは、テラモンの子アイアスから
もう全く身体を離そうとはしなかつた。

休閑地だつたところを、葡萄酒色の二頭の牛が組んだ犁を

気持ちに合わせて引いているよう。その

角の付け根あたりにはどっさり汗がにじんでいる。

畝に沿つて励む二頭を隔てるのは磨きぬかれた軛のみ。

そして犁は畑の端に至る。とでもいうように

二人はびたりと互いに寄り添つて立っていた。

テラモンの子には多くの勇敢な兵士が

付き従っていた。そして彼から楯を預かつていた、

疲れて汗が膝まで滴るたびに。

しかし勇敢なオイレウスの子アイアスにはロクリス人が従つていなかった。
というのは近接して戦う勇気が彼等にはなかつたから。

馬毛をつけた青銅の兜も持っていないかった。

丸い形の楯もとねりこの槍も持たず、

弓と、羊毛を巧みに纏った投石器を頼りに、

イリオスにまで付いて来たからである。しかしこの飛道具を

ひっきりなしに使って、トロイア人の戦列を破っていったのである。

その時もまたに前方ではテラモンの子の兵士達が美々しい武器をつけて

戦っていた、トロイア人と青銅の槍振り回すヘクトルと。

オイレウスの子の部隊の方は後方から身を隠して矢と石を放っていた。

トロイア人は闘志を失っていった。矢を受けて混乱させられていたからである。

その時惨めにも相手の船と陣屋から

トロイア人は、風強きイリオスへと引き上げることになったであろう、

もしポリュダマスが豪胆なヘクトルのそばに立ってこう言わなかったら、

「ヘクトルよ、そなたは難しいお人だ、なかなか人のいうことを聞かぬ。

そなたには神が並みはずれた武勇を授けた。そこで

策略でも他に優れていると思いたがる。

だがそなた一人で何もかもいっぺんにとりしきることではできないだろう。

というのは神はある者に戦いの技を授けたならば、

ある者には舞踊の、またある者には琴と歌の

またある者の胸の内には、はるかを見通すゼウスは思慮深さを授けたのだ。

そして多くの者がその男から恩恵を被る。

そして多くの者を救うのだ。そしてその当人もそのことをよく承知しているのだ。

さればこのわたしが言おう、最善と思われるところを。

だってそなたの周りには一面戦火の輪が燃え広がっているではないか。

勇気あるトロイア人は防壁を乗り越えてからというもの、

七五

七〇

七五

七〇

七五

ある者たちは武具を付けたままぼんやりしているかとおもうとある者たちは船の間に散り散りになって、多勢に無勢で戦っている。

さあ引き下がって将達を全員ここに呼び集めてほしい。

そうすればあらゆる点から協議することができよう。

多くの糧受けを備えた船の中に襲いかかったものか、

神が勝利をあたえてくださったるつもりならばだが。それともまたは

船から安全に引き上げたものか。実はわたしとしては

恐れているのだ、アカイア人が昨日の借りを返してくるのではないかと。

船の傍らには戦に飽きることのない男が控えているのだから。

その男が戦いからすっかり身を引いたままでは思えない」

このようにポリュダマスは言った。適切な話でヘクトルの意になかった。

ただちに戦車から武具のまま地上に飛び降りた。

そして彼に翼のある言葉をかけて言うのだった。

「ポリュダマスよ、そなたはここに将達全員を引き止めておいてくれ。

この私は向こうへ行く、そして戦闘に立ち会う。

しかし皆にしかるべく指示をしたらすぐまた戻ってくる」

こう言った、そして突き進んでいった、雪でおおわれた山のように、

叫びながら。そしてトロイア軍と援軍の間を飛ぶように駆けていった。

人々はパントオスの子、心優しいポリュダマスのもとにみんな

急いで向かうのだった、ヘクトルの呼び掛けを耳にすると。

一方ヘクトルはデーイポボス、力強く指揮をするヘレノス、

アシオスの子アダマス、それにヒュルタコスの子アシオスを

前線の兵士の間で捜して歩き回っていた、どこかに見かけぬかと。

もはや見かけなかった、この者たちが無傷、無事な姿でいるのを。

ある者はアカイア人の船尾で

アルゴス人の手にかかつて命を失って横たわっていた。

またある者は相手の防壁の中で矢に射られ、槍で突かれていた。

そしてまもなくあの男の姿を見た、涙の戦場の左手に。

神にも紛うアレクサンドロス、髪美しいヘレネーの夫である。

味方を励まし、戦いへと鼓舞していた。

ヘクトルは近づいていき、なじって言った。

「恥知らずの باريسよ、格好だけの男よ、女狂いよ、女誑らしよ。

どこにいるか、デーイポボスと力強く指揮をするヘレノス、

アシオスの子アダマス、それにヒュルカノスの息子のアシオスは、

そしてオトリユオネウスは。もう崩れ落ちすっかり滅んでしまった、

そびえたつイリオスも。確かに今は完全に破滅だ」

彼に答えて言った、神に似たアレクサンドロスは。

「ヘクトルよ、兄上は咎のない者を責めようと逸っているが、

なるほどほかの時なら戦いを避けようとしたかもしれない。

しかしこのわたしだって母は全くの意気地なしに生んだのではないからな。

なぜなら船際で兄上が仲間達を戦いに立たせてからというもの

それ以来ここにあつて休むことなくダナオス人と

我々は戦い続けてきたのだ。兄上の捜している仲間のいく人かは殺された。

デーイポボスと力強く指揮をとるヘレノスの二人だけは

立ち去って行った、どちらも長い槍で

腕を突かれて。死は防いでくれた、クロノスの子ゼウスが。

さあ、率いていってくれ、そなたの気持ちが命じる方向に。

われらはしつかり気合いをいれてついて行く。断言する、

あたらうかぎり力をおしむことはない。
いくら気負つても力以上の戦いはできぬが」

こう言つて兄弟の気持ちをなだめた、勇者パリスは。

二人は戦いが一番激しいところに行った、

それはケブリオネスと優れたポリュダマスがいたあたり。

それにバルケス、オルタイオス、神にも比すべきポリュペテス、

そしてバルミュスがいたあたり、それにヒツポテイオンの二人の息子アスカニオスと

モリュスがいたあたり。彼等は肥沃なアスカニアから前の日の朝、救援に駆けつけた者。

その時ゼウスは戦いをかきたてた。

彼等は荒れ狂う風のように、旋風のように進んでいくのだった。

その旋風は父なるゼウスの雷鳴とともに大地に吹きつけ

そして海面にぶつかつて凄まじい音を立て、そして

鳴り轟く海に数多くの波が砕け散りながら、

白く泡立つてうねっていく、前を別の波が行くと、続いて別の波が。

そのようにトロイア人は、密集して前の者が行くと、続いて別の者が

青銅の武器をきらめかせながら、指揮者たちに従つて行くのだった。

その先頭に立っていたのがブリアモスの子ヘクトル、その様は男らを

滅ぼすアレースに似ていた。まあある楯を構えていた、

それは獣皮をびっしり重ね、厚い青銅の板がおおっていた。

こめかみのところで兜が輝き、揺れていた。

進み出て、相手の戦列の周囲で、試みるのだった、

楯を構えて進み出る自分に対して、相手が引き下がるかどうかと。

しかしアカイア人の胸中の士気を失わせることにはならなかった。

真つ先にアイアスが戦いをいどんだ、大股に進みながら。

「おかしな奴よ、近寄つて来い、アルゴス人を脅すなどという無駄な事をしているとはどういうつもりか。我々は決して戦い方を知らぬ者ではない。ただゼウスの悪意ある鞭で我々アカイア人は打ちのめされたのだ。

どうもそなたは我々の船を打ち壊そうとはやっつていようだ。

しかし我々にも防ぐ腕があることは、これは確かだ。

それより前にそなたらの見事に住みなしている町の方が

我々の手にかかつてくだかれてしまふだろう。

当のそなたにしても間近いと断言する、逃げながら

父なるゼウスと他の神々に祈ることになる時が。

鬘美しいそなたの馬が鷹よりも速くあつて欲しいと。

平原に砂埃を立てて町へそなたを運んでいくことになる馬がな」

こう言うと彼の右手の方に鳥が飛んだ、

空翔ける鷹が。アカイア軍の兵士らは歓声を上げるのだった、

鳥のよい兆に力づけられて。これに言い返すのだった、輝かしいヘクトルは。

「しどろもどろのアイアスよ、大ぼらふきよ、なんたることをいうか。

この俺は神の楯持てるゼウスの子でいつまでもありたいものよ、

尊き女神ヘーレーの子でありたいものよ、

アテーネーとアポロンが敬われているように敬われていたいものよ、

ちようどそれは今、この日が、アルゴス人全員に災いであるのと同じくな。

そなたも兵士ら共々討たれるであろう、敢えてそなたが

私の長い槍に立ち向かうならばだが。そなたの生白い膚は

突き破られるだろう。そしてトロイアの犬と鳥を堪能させることだろう、

そなたのあぶら身と肉で、アカイア人の船の傍らに倒れて」

こう言つて先頭に立った。将達は後ろに従うのだった、

耳をつんざくばかりの声を上げて。その後ろから兵士らが喊声を上げるのだった。
一方アルゴス人は反対側から喊声を上げていた。そして士気を
失わず、攻め寄せるトロイアの勇士に立ち向かうのだった。
両軍の立てる物音はゼウスの稲妻輝く天空に達した。

(五六)

第十三歌了

八五